

花のお江戸を歩く会

東京ミステリーゾーン散歩

「大崎～戸越八幡神社～西大井散歩」

緊急連絡 = 070-5019-4033

《散歩道のご案内》

江戸・東京にはガイドブックに載らないミステリーな地域があります。そうした地域にも大崎は室町時代には、品川宿から多摩地域への街道のため、目黒川に居木橋（いるきばし）がかけられ、現在の居木神社周辺に集落が形成されていました。

大崎という地名が現れたのは江戸時代という説が有力である。大きな崎（岬）として東京湾に突き出ていたためとする説が知られています。戸越はこの地が江戸越えの村だったことに由来するという。この江戸越えが「戸越」になったといわれている。戸越の名のおこりといわれている古歌を刻んだ石碑が地域内の戸越八幡神社にある。西大井は我が国最初の総理大臣伊藤博文の墓所がある。今回はガイドブックにも紹介されない、江戸時代は近郊農村地帯でもあった、一人では歩けない、貴方の知らない東京のミステリーゾーンを歩きます。

《散歩道の順路》

大崎駅北口改札前→ニュー大崎アケード→居木神社→百反通り→貴船神社→大正6年道標→西品川3丁目庚申塔→大崎中学校→戸越銀座商店街→戸越八幡神社→行慶寺→文庫の森→戸越公園→大原不動堂→下神明駅→伊藤家の森（社松斎景湖墓所）→四間通り→東照寺→大原不動堂→鬼門除け地藏堂→品川用水跡→下神明天祖神社→東光寺→小野学園→滝王子通り→滝王子稲荷神社→大井図書館→池上通り→品川歴史博物館→鹿島神社→原の水神池→金子山稲荷神社→西大井本町通り→山王ロマンチック通り→善玉寺→伊藤博文墓所→JR横須線・総武線・湘南ライン線「西大井駅」（解散）

《個別ガイド》

【大崎の地名由来】

大崎という地名が現れたのは江戸時代という説が有力である。地名は秩父から続く尾崎（崎の尾っぽ）であることに由来し、これが転訛して大崎となったとする説、および過去に大きな崎（岬）として東京湾に突き出ていたためとする説が知られている

① 居木神社

創建に関しては明らかになっていないが、江戸時代初期には目黒川のゆるぎ橋（現在の居木橋[1]）付近にあったといわれている。川の近くにあったため風水害の被害を受けやすく、村民らによって現在の地に遷座されたという。それと同時に神社付近に人々も移り住み、新しい村づくりがなされたといわれている。

言い伝えによると当初は「雉子ノ宮」と称していたが、現在地に遷座される際に村内の貴船明神、春日明神、子権現稲荷明神もあわせて祀ったので「五社明神」とも称した。1872年（明治5年）に現在の居木神社となり、村社となり、村内の稲荷神社、川上神社、本邨神社が合祀された。1930年（昭和5年）に社殿が新築されたが、1945年（昭和20年）に第二次世界大戦により焼失。現在の社殿は1978年（昭和53年）に再建されたものである。また、境内にある富士塚は「しながわ百景」に指定されている。

② 百反通り

一般に「ひゃくたんざか」と呼ばれているが、古い人たちは「ひゃくだんざか」と呼んでいる。昔この坂は階段であったため百段と呼ばれていたものが、のちに路面が平坦になり、名称だけが百反となって残ったものといわれています。

③ 貴船神社

和銅二年（709年）藤原伊勢人の御勸請により創建、貴布禰大明神と号していた。水神として崇められ、享和三年（1803年）貴船神社と書くように改められたと伝えられる。八幡太郎 源義家も奥州へ行くとき参拝したといわれている。

文政11年銘道標

高さ1mほどの角柱型の道標で、背面に見られる居木橋村の名主の松原氏が、文政11年（1828）に造立。居木橋村と品川宿枝郷三ツ木との境にあったもの。居木橋村の名主は代々松原氏が務めており、道標背面に見られる松原氏は名主であり、観音信仰と交通の便を兼ねて文政11年（1828年）に造立したものと思われる。→碑文谷道

④ 西品川3丁目庚申塔

庚申供養塔は、庚申信仰のよりどころとして講中が造立したもので、江戸時代始め十七世紀後半に各地にさかんにつくられた。本供養塔は、延享四年（千七百四十七）の造立である。庚申供養塔は、農村の都市化の中で、一ヶ所に集められたり、寺院に移設されたりしているものが多い。しかし、本供養塔は、わずかな向きの変更・移動はあるものの、建立以来の位置から大きな変動はない。この場所は、付近の道標の位置などから地元の住民がよく承知している古道の道筋にあたると考えられる。また、この供養塔の東側には、地元でのかかわりや経過を記した記念碑（記念碑）が建てられているが、このような記念碑の添えられている供養塔は貴重である。→大崎中学校

⑤ 戸越銀座商店街

戸越銀座（とごしぎんざ）は東京都品川区豊町および、戸越、平塚にまたがる戸越銀座通りに沿った商店街で、3つの商店街からなっている。全長約1.3kmにわたる関東有数の長さの商店街である。なおメディアなどでは、日本一長い商店街であると紹介されることもあるが、実際は大阪・天神橋筋商店街の約2.6kmが最長とされる。→八幡坂

⑥ 戸越八幡神社

大永6年（1526年）に行永法師という諸国を行脚していた僧が、村内の藪清水池水源地に誉田別命（応神天皇、八幡神）の神体が出現したのを見つけたので、草庵を作りまたそ

ここに京都・石清水八幡宮から分霊を勧請して共に祀ったのが始まりであるといわれている。人々が祈願するとたちまちにかなうといわれていたので、成就庵と呼ばれた。

その後文禄元年(1593年)に、近隣にある別当寺だった行慶寺の開山・念誉によって成就庵のところに八幡神社を建立してご神体を阿弥陀如来と共に祀ったといわれている。その後、元禄元年に現在地に移転された。別当は明治時代に神仏分離令により廃止された。社殿は200年ほど前に建立されたもので、安政2年(1855年)に改築されたものである。現在でも地元の人々から信仰を得ている。

戸越の名のおこり

たちまちに願いがかなうと言う成就庵の評判を歌った古歌に「江戸越えて 清水の上の成就庵 ねがひの糸の とけぬ日はなし」という詠がある。成就庵は戸越八幡神社の起源となった草庵である。ここに詠まれているようにこの地は江戸越えの村ということで、「江戸越」(えどごえ)がやがて「戸越」という地名になりそれが現在の地名になっているといわれている。→行慶寺

⑦ 文庫の森

現在の「文庫の森」一帯は江戸時代前期の1662(寛文2)年に肥後の国熊本藩主細川越中守重利が下屋敷として排領し、1890(明治23)年に財閥の三井家の所有となった。やがて、この地に三井文庫が設置された。その後、国文学研究資料館として利用され2008年に移転、跡地を公園として開放している。

⑧ 戸越公園

当地一帯は江戸時代初期の寛文年間に熊本藩主・細川家の下屋敷があったところで、後に細川家の戸越屋敷として屋敷や回遊式庭園などが整備された。その後所有者は、松江藩松平不昧公家や出羽上山藩松平氏、久松松平氏などを経て、明治維新後は久松伯爵、吉井幸蔵伯爵、彫刻家の堀田瑞詳などの所有を経て1890年に三井家に移った。1932年には三井家から当時の荏原町(後の品川区)に庭園部分が寄付され、1935年3月24日に東京市立戸越公園として開園した。1950年には管轄が東京都から品川区に移譲された。江戸時代の回遊式庭園の雰囲気良好に保たれており、品川区を代表する公園として知られる。

⑨ 大原不動堂

江戸時代に上総の国(千葉県)大原から不動尊が修行者によって運ばれて来たので大原不動尊と呼ばれたようです。また江戸時代にはこの地は、武蔵野国荏原郡蛇窪村上蛇窪大原台という地名でした。台座の六十六部廻国供養道標は不動尊より後に川崎から釈宜縁(しゃくぎえん)という行脚僧によって運ばれて来たとのこと。不動尊は村人の信仰を集め、どんなイボでも治し、お産を軽くするといわれていたそうです。現在は癌封じ、ボケ封じなどお年寄り中心にいぼとり祈願する方が沢山いるとのこと。

⑩ 金子家のカキ

本樹は、禅寺丸の柿で、今でも沢山の実をつける。幹囲1m72cm、樹高12m50cm、樹齢埴300~350年。幹が地上1m70cmのところまで二つに分かれ、趣のある形をしている

⑪ 鬼門除け地藏堂

東光寺の鬼門よけに建てられた地藏堂。鬼門というのは、陰陽道で「鬼が出入りする」として万事に忌み嫌う方角のことで、「良」（うしとら）つまり東北の方角をさす。この地藏は「東光寺」に所属し、東光寺の鬼門にあたるため、「鬼」の進入を防ぐ目的で建てられている。→品川用水跡

⑫ 下神明天祖神社

創建に関しては明らかになっていないが、文献では江戸幕府六代将軍・徳川家宣の時代以前から鎮座していたという。その後、蛇窪村（江戸時代の当地の地名）が上蛇窪村と下蛇窪村に分かれた正保年間（1644年から1647年）に、天祖神社が下神明天祖神社と近隣の上神明天祖神社とに分かれたとされているのが有力な説であるが、その時期などについても確実な記録がない。

⑬ 東光寺

山号は、久遠山不動院、戦国時代、天文13年（1544）の創建と伝えられる。現在の本堂は文化12年（1815）の建造。梵鐘も同じ年に、浅草田町の上総屋喜兵衛らが寄進したもの。荏原七福神のうち、毘沙門天を祀っている。→小野学園→滝王子通り

⑭ 滝王子稲荷神社

昔、この付近に滝氏という一族が住んでいて、稲荷社とあわせて王子権現（現北区）を祀っていたところから、滝王子稲荷の名がおこったという。境内の湧水池はかつては野菜など農産物の洗い場として利用されていた。滝王子稲荷神社のタブノキは根元の周囲はボク石（溶岩）で囲まれている。幹囲3m、樹高約15m、樹齢は250～300年。木の勢いもよく自然の姿を保っている。→大井図書館→池上通り→品川歴史博物館

⑮ 鹿島神社

当神社の社伝によると、安和2年（969年）に大井の常行寺の僧、尊栄法印が常陸国鹿島神宮より分霊を勧請したことに始まり、同時に別当として来迎院を建立したという。また古来より祭礼として相撲が奉納されており、渋谷氷川神社、世田谷八幡宮と共に江戸郊外の三大相撲として知られていた。現在の社殿は昭和6年（1931年）に竣工した。旧社殿は文久2年（1862年）の造営で精巧を極めた鎌倉彫の彫刻が施されており、これを後世に伝えるため境内末社として移設して現存してある。

⑯ 原の水神池

武蔵野台地末端部のこの遊水池は、もと原・出石などの農家が出荷する野菜を洗った洗い場で、傍らの水神社は、水の恵みに感謝した農民が祀ったもの。かつて水神が眼の神様とされ、池の水を持ち帰り、治った者は池に鯉を放ったという。

品川昔話 「大井・原の水神池」

江戸時代の品川というと、東海道の宿場町や江戸内湾（東京湾）の漁業のことが思い浮かびますが、当時、品川のほとんどの地域では農業が盛んでした。

けれども、水に恵まれなかったため、わき水のあるところは、水神様が祀られ、大切に

されていました。西大井三丁目にある「大井・原の水神池」にも水神の祠があります。明治12年(1879)に再建されたもので、その横には水神池の碑と並んで鯉塚も建っていて、こんな話が伝えられています。

昔の大井村あたりは、立会川沿いと南大井を除いて、海に面した丘陵が続いていました。土地は、田んぼより畑に向いていたので、村人たちは、丘と海の間ひらけた土地をせつせと耕しては、葉っぱやニンジン、イモ、ダイコンなどの野菜を作り、江戸や宿場に売って暮していました。出荷前の野菜は、池の水を利用して洗っていました。村人たちは池の近くに水神様の祠を建てて、大井・原の水神池として大切に守っていました。

あるとき、村人のひとりが、目の病にかかり困っていました。「これは大変だ。原の水神池の清らかな水で洗ってみてはどうだ」と言われた村人が水をくんで家に持ち帰り、毎日目をあらったところ、すっかりよくなりました。「いや、うれしい。すっかり目の病がよくなった。水神様にお礼をしたいものだ。そうだ、水神様にコイを放してはどうだろう」。

その村人が水神池にコイを放してから、ほかの目の病にかかった人もやって来て水を汲んで洗い、治るとコイを放すようになりました。

⑪ 善玉院（大井の大佛）

かつて上野（台東区）にあった養玉院と芝高輪（港区）にあった如来寺の2寺が1926年に合併して成立した。前身2寺院の名称をとって「帰命山養玉院如来寺（きみょうざんようぎょくいんによらいじ）」と号する。宗教法人としての登録名は「養玉院」であるが、「養玉院如来寺」、「如来寺」とも呼ばれる。

五智如来堂の瑞應殿（ずいおうでん）には五智如来像（大日如来、薬師如来、宝生如来、阿弥陀如来、釈迦如来）が安置されている。五智如来とは密教の主尊である大日如来の有する5種の智慧を象徴したものである[2]。5体とも像高約3メートルで、「大井の大佛（おおいのおおぼとけ）」として親しまれている。ただし、薬師如来像以外は享保10年（1725年）と延享2年（1745年）の火災で焼失、その後再興された。対馬藩・宗氏、大和高取藩・植村氏の歴代の墓がある。

⑫ 伊藤博文墓所

伊藤博文は現在の山口県光市の出身で、9歳のとき、萩の足軽伊藤家の養子になりました。松下村塾に学び、高杉晋作らと尊攘、討幕運動に奔走し、維新後は憲法制定に尽力し、初代内閣総理大臣を務めましたが、明治42年10月26日にハルピン駅頭で暗殺されました。伊藤博文が晩年を過ごした品川区西大井の一角に伊藤博文の墓所があり、周辺は伊藤町という地名がつけられましたが、区画整理により惜しくも失われてしまいました。現在でも、伊藤小学校、伊藤中学校という校名に、その名ごりがあります。なお、墓所は通常門が閉ざされており公開されておりませんが、10月26日の命日には中に入ることができます。→JR横須線・総武線・湘南ライン線「西大井駅」（解散）